
スタイル

かみたか さち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スタイル

【Nコード】
N8067T

【作者名】
かみたか さち

【あらすじ】
公志とずっと一緒にいたい。進路だつて、彼と同じ道にした。なのに、当の公志が進路に対し悩みを抱き始めてしまった。未来の心も迷いだす。

『0チヨコ』『昨日の空』の続編

マンションが見えてくるころ、佐倉未来は制服のスカートを翻して正木公志をふり返った。

「今日、あのドラマの総集編あるよね。ね、お父さん夜勤だから、うちで見ない？」

公志が進路目標を決めるきっかけとなった、検察官を主人公にしたドラマ。しかし、彼はテニスラケットのケースを持ちかえると曖昧に目を反らせた。

「一度見たし、な」

「えー。あの女性検事の『これが真実ね』フツ。って決め台詞、何度見てもいいって、言ってたじゃん」

目と鼻の間まで伸びた前髪を指でかきあげ、主演女優の真似までして抗議したが、公志の反応は薄かった。未来は、頼ひきつらせながら辛うじて笑った。

「つれないなあ、公志い。そりゃドラマは、実際の検察とは違うけど、将来の参考にはなるんじゃないの？」

「どうか」

眉を漢数字の「八」の字型に下げながら笑う公志の寂しい気配に、未来は内心舌打ちする。この手も通用しない。

「あ、そうだ。私、ちょっとは料理の腕が上がったんだよ。明日、なんか作るうか？」

「あー。今うち、胃腸薬切らしてんだ。お袋が買ってきたら、頼む」「何それ！」

握った拳を振り上げながら、自分でも妙に納得してしまうのが悔しい。公志を元気づけるつもりが、暑い時期だし、食中毒に遭わせたいいけない、と思ってしまう。

ふざけたように未来へ背を向けマンションのエントランスへ歩く公志の姿が、正面のガラス戸に映る。ガラス戸の表面で彼がため息を

つくのを、未来は見逃さなかった。

仕方ない。直球勝負でいこう。

未来は、心に決めた。部活でも彼の得意のサービスが半分も決まらないほど、何を悩んでいるのか。恋人として、ふさぎこんでいる公志を見ているのは辛い。先に立って、エレベーターではなく非常階段を上る後ろに追いつき、気持ち小声で話しかけた。

「ひょっとして、だけど、今日の進路指導でなにか言われた？ 勉強なら、付き合うよ？ もともと理系の公志が法学めざしてるんだから、大変じゃない？」

足音が、狭い階段にこもる。ふたりの他は使う人がいないのか、隅のほうで積もったほこりが揺れた。公志は、うつむき加減に背中を見せたままだ。さらに口を開こうと踊り場へ上がった未来は、次の瞬間、公志の腕に包まれていた。

「ごめんな。未来に心配させて」

「…気づいてくれてるなら、いいよ。なんか悩み事？」

よしよし、と公志の頭を撫ぜる。堅く短い公志の髪が、未来の指の間でざわざわ動いた。間を置いて、公志がささやく。

「なんかさ。最近のニュース見てると、ゲンメツって感じでさ」
どくり、と未来の心臓がひきつった。

「俺の思ってる検察と、かけ離れていくようで。今さら志望校変えるのも難しいよな」

「そ、だよな。今さら、だよな」

鼓動が頭まで響く。軽く重ねた唇の感触を帰りつくまで覚えていられないほどに、未来は動揺していた。

今さら。

食卓の上に投げ出した進路指導資料を、覆いかぶさる前髪ごしにみつめた。

今はマンシヨンの隣人でも、違う大学へ行けば離れ離れになってしまうかもしれない。そんなのはイヤだ、と公志を追いかける形で志望校を決めたのに。もちろん、それは自分の勝手であって公志に

罪はない。頭では分かっている。

未来ひとりしかないマンションの部屋には、テレビドラマの音声が無意味に反響していた。父は夜勤。母は入院。がらんとした静けさに飲み込まれそうで、夏だと言っのに寒気がして、うずくまった。

気が付くと、携帯を手に使っていた。モニターに公志の番号が浮かんでいる。通話ボタンを押せば、公志につながる。電波だけでも彼とつながっていたい。けれど、今の状況で何を話そう。余計に彼を悩ませるだけになりそうだ。

こんなはずじゃなかった。

リセットした携帯を資料の上に置き、未来は長くなった前髪を指先で引っ張った。

公志と付き合う前は、誰かと一緒になければトイレにも行けない、など信じられなかった。そういう意味で人に合わせるのは鬱陶しいだけだったのに。

公志とずっと一緒にいたい。別々の道を歩みたくない。彼と同じものを見て、同じ体験をしたいと思う。そうでなければ、ふたりの距離がどんどん離れてしまいそうで。

音をたてて涙が落ちた。未来は唇をかみしめ、前髪をかきあげた。視野が明るくなり、気持ちもわずかだけ上向いた気がした。自分らしくもない落ち込み様は、長い前髪のせいだろうか。

いっそのこと、髪なんて切ってしまおうか、と、無造作に片手で前髪を束ねたままハサミを探して視線をさまよわせる。しかし、例の女優みたいに髪を長くした未来を見てみたい、と言った公志の甘い声を思い出すと、断髪の決意はとろとろ溶ける。代わりに、食卓に転がった輪ゴムが目にとまった。試しに輪ゴムで束ねてみた。

髪を結ぶなんて初めてだ。結ばないといけないほど伸ばすのが初めてなのだから。苦労してどうにかまとめると、出来栄を鏡に映してふき出してしまった。

「なあに、これ。むっちゃ変」

笑いで震える指でほどこうとするが、今度は悲鳴をあげた。天然ゴムの細いひもは髪の毛をからめたままねじれ、あせるほどに複雑にからまっていく。

「いた！」

最後には不吉な音をたて、切れた髪が巻きついたままの輪ゴムが、手の中で身もだえした。

「サイアク……」

一人で沈み込んで、腹をかかえて、大騒ぎした揚句涙をながして何をやっているのだろう。

楽しいことを考えよう。

明日は土曜だし、気分転換も兼ねてショッピングモールへ行こう。いつものように、公志と一緒に。どの服、着ていこう。天気は晴れの予報だから、暑くなりそう。ちょっと大胆に、胸元の大きくあいたのにしようか。それとも、ビーズ刺しゅうのキャミとか。

しかしながら翌日の朝、未来は一人でショッピングモール付近の商店街に立っていた。開店までまだ時間があり、人通りもまばらだ。石畳の道を、未来は足音荒く歩いていった。

なんでケータイつながらないのよ！

怒り心頭の様で手を大きく振って進む未来に、すれ違う人は恐れをなして道をあける。公志は今、どこにいるのだろう。公志の母も、彼がリュックを持って出かけたことしか知らなかった。

もう一度電話しようと立ち止まった未来は、ふと、すぐ脇のショーウィンドウに目をとめた。壁面を黒っぽい木材で覆ったカントリイ風の店のウィンドウには、流木やアースカラーの布を背景にしてハンドメイドのヘアアクセサリーが飾られている。

可愛い。

吸い寄せられるように近付き、手前におかれたツールペイントのプレートに店名を見つけた。クラスの子たちが噂していたショップだ。斜めに差し込む光が、ウィンドウの表面に未来の上半身を映し出す。未来は、人目を気にしながら前髪を持ち上げた。

ここに、あの桜色の地に生成りの水玉があるシユシユをつけたらどうだろう。それとも、あちらのサックスとレースを重ねたものは？ 公志なら、どんなのがいいと言っだろうか。

彼の顔を思い浮かべ、我に返る。ヘアアクセひとつも、自分で選べなくなっているのに愕然とした。まるで、自分というものがなくなっただけだ。

公志のせいだ。

意味もなく八つ当たりをする。やけくそにケータイを手にすると、アドレス帳をスクロールして、うさばらしにつきあってくれそうな友人を探した。

つと、瀬尾理人せおりひとの番号で手が止まった。ここで彼を呼びだしたら、まさに公志に対するあてつけた。未来への好意を表明し、公志にライバル宣言を突きつけた彼に慰めてもらおうなど、公志に対する裏切りに他ならない。一度はやり過ぎた未来だが、一通りアドレス帳に目を通したあと、再び同じところで画面をとめた。

瀬尾も昨日、公志の様子に気付いているみたいだった。そのうえで、あの癒し系の笑顔で話を聞いてくれるなりゲーセンに付き合ってくれと、安らぎそうだった。

だめだ。

ぶんぶん頭を振っていると手の中で着信音が鳴り、慌てる。液晶画面に浮かんでいるのは、ほかならぬ瀬尾の名だった。心臓がどきりと止まりそうになった。

震えながら返答すると、いつものおっとりとした瀬尾の声が耳元で流れた。

『ね、佐倉さん、今どこにいるの？』

『どこって…』

どういつつもりが計りかねていると、瀬尾が続けた。

『図書館来たら、正木くんひとり居たから。別行動なんて、珍しくない？』

未来は、顔をあげて通りの向こうを見た。図書館は、ここから歩

いて十分ほどのところだ。どうりで携帯がつかないわけだ。この図書館は、館内に電波が入らないよう造られている。瀬尾も、館外に出てかけているのだろう。

ようやく公志の居場所が分かった。ほっとする未来の耳に、心配そうな瀬尾の声が届く。

『なんかあつたの?』

「え?」

『正木くん、昨日からムズカシイ顔してるよね。ケンカでもした?』
「ちがうけど」

かいつまんで公志の悩みを教えた。

「公志が進路変えたら、私、どうしようかと思って」

『なんで?』

「だって、一緒のところに行きたくて…」

言いかけて、口を押える。瀬尾に、未来自身の進路について話したことはなかった。ましてや、公志に合わせて進路希望を決めていたなど、余計なことを言ってしまった。

瀬尾は、少し笑い、いつものおっとりした口調で言った。

『ちよつと意外』

「な、何が?」

『僕、佐倉さんって、正木くんがどうであろうと、自分の進みたい道、行く人かと思ってた。で、そんなところが好きだったりするんだけど』

ぼん、と未来の顔が赤くなった。人目を気にして、あたふたと近くの電信柱と立て看板の間に鼻先をおしこむ。

「なななな何よ、いきなりこんなところで」

電話の向こうで、瀬尾がクスクス笑っている。電話越しのせいか、いつもと彼の雰囲気違っていている気がして落ち着かない。

『でもね、正木くんも、同じだと思うわけ』

「え」

胸が、とくりと鳴った。とくとくと意識される血のめぐりと共に、

幼いころの記憶が運ばれてくる。いつどこでどのような時だったか思い出せないけれど、確かにずっと子どものころ、公志が言っていた。

——未来ちゃんって、いつも真っ直ぐ立ってる感じで、かつこいいね。

『なんか、佐倉さんって正木さんと付き合いだしてちょっと変わったけど、正木くんが好きになったのは、それまでの佐倉さんなんですよ？』

「うん…。そうだね。めそめそ後ろにくっついて行く私じゃないよね」

『あ、でも、そうやって好きな人についていくのも、大歓迎だな。佐倉さんが追いかける人が僕なら』

「…なんか今日の瀬尾くん、やけに大胆じゃない？」

『そお？』

「からかわないでよ」

言いながら、涙声になってしまう。公志が好きになってくれた自分の姿。大事なことを思い出させてくれた瀬尾への感謝が、胸にあふれる。

『泣いてる？』

「ごめん。ちょっと、気持ちたかぶっちゃった」

『あ、どうしようか。今からそこ、行こうか？』

「来なくていいって」

耳に当てた端末から漏れる切ないため息に、未来の手が震えた。

『泣いてるなら、さ。冗談じゃなくて、僕、抱きしめたくなるよ、佐倉さんのこと』

ごめん。

心の中で呟いた。瀬尾は、優しい。公志にない細やかさがある。つい引き込まれそうになる気持ちを押しとどめ、指で涙を拭いた。公志との仲を応援すらしてくれる瀬尾の好意に甘えていては、瀬尾にも申し訳ない。

青い夏空を見上げようとして肘を看板にぶつけ、それが美容院のものだと気が付いた。

「公志、まだ長く居そう?」

「居るんじゃないかな。いろんな本、積んでたよ。こっち、来る?」
「そうね」

前髪を掻きあげて、未来は少し考えた。

「お昼前くらいに、まだ居るようなら」

「んー。残念。それまではいないよ」

「あ。じゃあ、公志に、そっち出るとき連絡してほしいって、伝えてくれる?」

「あ、なんだ。僕じゃなくて正木くんのこと」

「と、当然でしょ」

平然と言うよう努めたが、声が少し震えた。耳元で、瀬尾が喉の奥で笑うのが聞こえる。

『二階の自習室。窓側の後ろの方に居たよ。行っただけ』

「うん」

『佐倉さん』

「ん?」

『そんな佐倉さんのこと、やっぱり僕、好きだよ』

言葉に詰まる未来の手元で、通話が途絶えた。火照った頬を手荒く拭くと、心の中で瀬尾に悪態をつく。公志への想いに迷いはないが、そう大ぴらに好意を見せつけられると。

困るじゃないの。

携帯を鞆へほうりこむと、未来は看板に従って、甘い薬品の臭いが充満する店へ入って行った。髪を切る決意と共に。

結局いつもと変わらない週末を公志と過ごした。ファーストフード店で昼食をとり、他愛のない話をし、日曜日には、公志の母が作ってくれた弁当を持って市のテニスコートへ足を運ぶ。

その間どちらからともなく、幾度か言葉を切って目を反らせる時があった。進路についての気持ちを、聞きたいし伝えたいのに、言

いだせない。

どうせ、月曜になれば分かる。

落ち着かないが、公志のことは公志が言いだすまで待とう。その時に、自分のことも言おう。じりじりと、月曜日の朝まで耐えた。電車が、高校のある駅に止まる。陸橋を越えて改札へ向かう間に、反対方向からの電車もホームへ滑り込んできた。制服を着た学生のにぎやかなざわめきが立ちこめる。

公志に続いて改札を過ぎると、後ろから瀬尾が声をかけてきた。テニス部の引退試合の話で盛り上がった後、さりげなく瀬尾が問いかけた。

「進路希望調査の、正木くん、どうした？」

「決まってるんだろ。検察官だよ」

力強い言葉に、未来は思わず公志の手を握った。公志もまた、未来に向かって頷く。

「なんのかんの、イメージダウンしちゃってるところだけど。俺は、悪いイメージを吹き飛ばすくらいの検察官になってやる」

真っ直ぐに理想を見上げるような公志の明るい目に、未来は鼻の奥が、じいん、とした。雨の日もラケットを振るっていた、小学生の公志を思い出した。思えば、未来が公志を好きになったのは、その時からだった。どんな迷いも困難も払いのけて目標に一步一步にじりよる。彼の行く末を、ずっと見守っていきたい。

瀬尾がふわりと笑って片目をつむった。

「佐倉さんは？」

「理学療法士」

「は？ 未来、お前文系コースだろ。大丈夫か？」

額に皺を寄せる公志に、未来は胸を反らせた。

「がんばるもんね。目標決まれば、バリバリ勉強できるもん」

「えー。でも、なんで療法士？」

瀬尾が不思議そうに未来へ顔を向けた。

「お母さんのリハビリ見てるからね」

納得顔の瀬尾に、公志が空を仰ぐようにして言った。

「だったら、最初から理系にしときゃよかったのに。何も、俺に合
わせずに、さ」

「バレてた？」

視線を反らせた未来は、つい、服の裾を指先でいじる癖が出る。
気まずい時、誤魔化したいことがある時の癖。怒ったような顔で、
公志が未来の頭を鷲掴みにした。

「中学ん時、一番近いところにある専門学校まで調べてたじゃないか。
何がどう思っで心変わりしたのかと思っただけ」

「だって」

公志と離れたくなかった、とは、人前では言えない。一方で、口
にせずとも、公志が見抜いていてくれたことが嬉しい気がする。

ごつごつした手のひらで乱暴になでられ、未来は悲鳴を上げて公
志から離れた。

「なにすんのよお」

ぶつくさと乱れたショートヘアを直しながら抗議の目を向けると、
公志が愛おしそうに目を細めた。

「お互い、がんばろうな」

「うん」

短い前髪の一束をねじり上げながら、未来は頷いた。瀬尾も、ふ
わりと笑いながら公志の向こうから顔を出す。

「僕も応援してるからね」

「ありがとう」

「まずは、担任の説得、がんばってね」

「うわあ…。瀬尾くん、思い出させてくれてありがとう。忘れてた
わ」

未来がうんざりとする中、後ろから来た公志の友達連中が、公志
に絡みついてきた。にぎやかに談笑する彼らから一步下がり、未来
はそつと瀬尾と並んだ。

「あのさ。この前の電話、ありがとう」

「昨日言えなかった礼を、出来るだけなんでもないように伝える。しかし、瀬尾はきょとん、と首をかしげた。

「あれ？ 僕、佐倉さんに電話したっけ」

「ほら、土曜日の朝…」

キツネに包まれた、という文句を実感し、未来は自分の夏服の裾を指先で引つ張った。

しばらく思案顔の瀬尾が、青い顔で立ち止まる。

「あいつ！」

「え。ちよつと、瀬尾くん？」

「土曜日、隼人が。弟が僕の携帯、間違つて持つて…だから、同じ機種、嫌だつて言つてんのに」

「ということは。」

未来の顔から、湯気がたつた。

「でもでも、隼人くん、自分のこと、俺、つて言つてなかったっけ？」

「隼人、時々そういう『なりすまし』するんだよ。うわああ。あいつ、佐倉さんに何言つたんだあ！？」

うるたえる瀬尾（兄）を前に、啞然としていた未来もふつふつと可笑しさと恥ずかしさがこみ上げて来た。不覚にも心を奪われそうになった語り口が、瀬尾（弟）のいたずらだったとは。

「まあ、でも、嬉しかったよ、うん。瀬尾くんに感謝してマス」

「つて佐倉さん、それ、どっちの『瀬尾くん』なわけ？」

「どっちも、かな」

笑つて誤魔化し、未来はずつと先を歩く女友達の方へ駆けだした。公志を追い越しざまに視線を走らせると、彼の方でも未来をみとめて真っ直ぐ笑顔を向けて来た。

大丈夫。どんなに離れても、つながっていられる。公志のことを、感じていられる。

夏服が、強い夏の日差しをまぶしいほどに反射させていた。

(後書き)

感想募集中。

よろしければ、サイトも覗いてみてください。

<かみ たからはこ>

<http://www.piala.or.jp/kamitakarabako/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8067t/>

スタイル

2011年6月6日15時55分発行